

ヨハネによる福音書 8:12-30 ; 「『わたしこそ』という証言」——2026 年 9 月 20 日

I. 歓迎と振り返り

A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。主であり救い主で

あるイエス・キリストを賛美し、礼拝するために皆さんと共にここに集まることができて、本当に嬉しい。

1. 初めてお越しの方や、オンラインで視聴されている方々も、ようこそ。

B. 礼拝をさらに進める前に、小学生の子供たちを日曜学校の教室へ送り出そう。

1. 子供たちが移動している間、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネによる福音書第 8 章の箇所を開

いてほしい。

2. 聖書をお持ちでなく、お借りになりたい方は、遠慮なく周囲の椅子の下に置かれている聖書から一冊

取り出してください。一節ずつ聖書を読み進めていく中で、ご自身で聖書の言葉に目を通すことは重

要だと考えています。

C. 今朝は、ヨハネの福音書の学びを続け、前回中断したところから再開する。

1. 先週は、第 8 章の最初の 11 節を取り上げ、仮庵の祭りが終わった翌日に起きた、姦淫の現場で捕ら

えられた女性をめぐる出来事について詳しく学んだ。

2. パリサイ人たちはこの姦淫の現場で捕らえられた女性をイエスの前に引き出し、彼女を差し出して

、彼女にどうすべきかを尋ねた。律法では石打ちの刑と定められているが、彼らはイエスが彼女に

どうすべきだとおっしゃるのかを知りたがっていたのだ。

3. 実は、これはファリサイ派の一部が仕掛けた巧妙な罠であり、イエスを試して、イエスを告発で

きる材料を見つけ出そうとしたのだ。

4. 彼らは、イエスを追い詰めたと思い込んでいた。イエスが何を言おうと、必ず窮地に追い込まれる

はずだと考えていたのだ。

a. もしイエスが「この女を石打ちにしてはならない」と言えば、彼らはイエスをモーセや律法と

対立させ、偽りの教師として告発するつもりだったのだ。

b. しかし、もしイエスが律法に同意し、彼女を死刑にすべきだと裁けば、彼らはイエスをローマ

当局に引き渡し、ローマがユダヤ人から死刑を執行する権限を剥奪していたため、ローマ当局

に反旗を翻す扇動者であると告発できたのだ。

i. 言うまでもなく、それは「民衆の味方」であり、「徴税人や罪人の友」としての彼の公的な

イメージを台無しにする可能性が極めて高かった。

ii. 彼らの考えは、そうすればイエスを支持する民衆の熱意を鎮め、人々をイエスから遠ざけることができるというものだった。

c. そこで彼らは、自分たちの罠が実に巧妙だと考えていた。イエスがどちらの道を選ぼうと、

偽りの教師としてであれ、ある種の反逆者としてであれ、彼を攻撃し、告発することができる。

5. しかし、イエスは彼らの試みを完全に見抜いていた。彼らに直接応答する代わりに、ただ地面にひれ伏し、神殿の石の床に何かを書き始めたのだ。

a. 彼が何を書いたかは明かされていないが、それは宗教指導者たちに信じられないほど強い衝撃を与えた。

6. イエスは立ち上がり、宗教指導者たちにこう告げた。「あなたがたのうち、罪のない者が、まず石を投げなさい」と。そして再び身をかがめて、石の床に書き続けた。

7. すると、その女性を告発していた者たちは、年長者から年少者へと、一人また一人と、まるで行進するように、一言も発することなく立ち去っていった。イエスの言葉、そして明らかにイエスが石の地面に書いたものは、彼らの心に罪の自覚をもたらし、彼らは去っていった。その結果、群衆の中に、その女性とイエスだけが残された。

8. するとイエスはその女の方を向き、「女よ、あなたを告発していた者たちはどこにいるのか。あなたを裁いた者は誰もいなかったのか」と尋ねた。彼女は「誰もいません、主よ」と答えた。イエスは彼女に言われた。「わたしもあなたを裁かない。行って、もう罪を犯してはならない。」（ヨハネ **8:11b**）

9. 罪深い魂に注がれる神の恵みを、これほど美しく描いた物語はない。イエスはこの女性の罪を容認したわけでも、その罪のために彼女を非難したわけでもなかった。しかし、彼女の罪を指摘し、「行って、もう罪を犯してはならない」と告げたのだ。イエスは恵み深く、愛に満ち、親切で、寛容でありながら、それでも罪を指摘し、彼女に悔い改めを求めたのである。

D. そして、先週の聖書箇所はそこで終わっていた。今朝はヨハネによる福音書第 8 章の記述を再開し、仮庵の祭りの翌日に神殿で何が起きたのか、さらに詳しく見ていく。

1. 今朝の聖書箇所はヨハネによる福音書第 8 章 12 節から 30 節であり、この学びのタイトルは「『わたしこそは』という証し」とする。

2. 皆さんがヨハネによる福音書第 8 章を開いていることを願う。もしそうなら、神と神の聖なる御言葉を敬うために、できる限り立ち上がってほしい。

3. 私の聖書から、本文全体を読み上げる。私は NKJV 版で読むので、別の訳本を読んでいる方は、私が読むのに合わせて、自分の聖書でできるだけ追いかけてほしい。

4. ヨハネは、仮庵の祭りが終わった翌日に神殿で何が起きたかについて、さらに詳しく福音書の記録を続けており、12 節には次のように記されている……（R & P）

II. はじめに；

A. 今朝、この学びに付けたタイトルは「『わたしはある』という方の証し」だ。

1. 「証し」という言葉は、今朝の聖書箇所にも何度か登場する。実際、ギリシャ語の語根が7回も使われているのだ。

2. イエスは周囲の群衆に語りかけ、特に、自分に敵対してやって来た宗教指導者たち——おそらく、その女性をイエスのところに連れてきた者たち以外の者たちだ。なぜなら、彼らは皆12イエスから離れていったからだ。そして、彼らに語りかける中で、イエスは特定の事柄について証しすることについて語っている。

3. それが「証人」という言葉の意味だ。それは、特定の真理や事実について証言したり、証しをしたりすることを意味する。本文の17節にある「証言」という言葉は、「証人」という言葉と同じギリシャ語の語源を共有している。したがって、イエスが証しをしており、本文全体を通じて特定の真理について証言していることが分かる。

4. そして今朝、この箇所を読み進めていく中で、12節におけるイエスの大胆な宣言から始め、イエスが証言している様々な事柄に注目していく。私と一緒に、もう一度そこを見てみよう。

III. ヨハネによる福音書8章12節；

A. 私たちの目の前にあるのは、ヨハネの福音書全体に見られる、イエスの大胆な「わたしは～である」という宣言のうちの二つ目だ。1. 最初の「わたしは～である」という宣言は、ヨハネの福音書第6章で取り上げられたもので、イエスは「わたしは命のパンである」と大胆に宣言した。（ヨハネ 6:35a）

2. ここでイエスは、「わたしは世の光である」と述べている。

B. そして、この宣言には深い意味と重要性が込められており、時間をかけて分析し、自分たちで理解する必要がある。

C. まず強調したいのは、イエスがこの大胆な宣言をされた時の状況について、私たちが知っている点に関する点だ。

1. ヨハネがこの章の冒頭である2節で記していることから、この宣言が仮庵の祭りが終わった翌日、まだ朝早い時間帯になされたことが分かる。

2. また、イエスがいた場所も分かっている。イエスは神殿の敷地内にいたことが分かっており、具体的には、本文の20節で、イエスがこれらのことを語ったのは献金所であったと記されている。

a. 宝物庫とは、人々が神殿税を納めたり、その他の特別な献金を捧げたりするために訪れる場所であった。

b. 歴史によれば、この場所は「女性の庭」内にあった。

i. 神殿の敷地はいくつかの庭に分かれていた。最も外側の庭は「異邦人の庭」と呼ばれていた。これは異邦人専用というわけではないが、異邦人が立ち入ることのできる最遠の場所であった。基本的に、誰でもこの最も外側の庭、すなわち「異邦人の庭」を通じて神殿の敷地に入ることができた。

ii. 異邦人の庭の内側には、女性の庭があった。これもまた、女性専用というわけではないが、女性が神殿敷地の中心に向かって進めるのはここまでだった。ここはユダヤ人専用であり、

異邦人の立ち入りは禁じられていた。そして歴史によれば、公の教えのほとんどはここで行われていた。

iii. 女性の庭の内側には、儀式的に清いユダヤ人男性のみが入ることが許された「イスラエルの庭」があった。そしてその先には祭司の庭があり、そこは神殿の敷地内で奉仕する祭司のみが立ち入ることができた。

c. つまり、イエスは女性の庭にいて、宝物庫の隣で、この大胆な宣言をしながら人々に教えを説いていたのだ。

3. さて、この事実は、イエスがこの宣言を行った背景をより深く理解するための、非常に重要な詳細である。

a. ミシュナーによると、仮庵の祭りにまつわる伝統として、人々が巨大な燭台を建て、仮庵の祭りの毎晩それを灯すという習慣があった。

b. 歴史によれば、高さ 50 キュビット（約 75 フィート）の巨大な柱が 4 本立てられ、祭りの期間中、毎日、祭司の血筋を引く若者たちが大きな梯子を登って、大きな鉢に油を注ぎ、芯の手入れをしていたという。（『ミシュナー・スッカ』5:2）

c. ミシュナーによれば、これらの燭台の頂部にはそれぞれ金製の盆が 4 つ取り付けられており、各盆には 120 ログの油（約 10 ガロン弱）を収容できたという。

d. そして毎晩、これらの燭台に火が灯され、その光は極めて明るく、エルサレム中のどの中庭も、この燭台の光で照らされないところはないと言われていた。（M. Sukkah 5:3）

e. そして人々は、これらの灯が夜通し燃え続ける中、踊り、歌い、喜びを分かち合った。レビ人たちは豎琴、ハープ、シンバル、トランペット、その他数え切れないほどの楽器を奏で、それは信じられないほど喜びに満ちた祝祭であった。（M. Sukkah 5:4）

f. 仮庵の祭りは、40 年にわたる荒野の放浪の旅を通じて彼らを導いてくださった神の恵みと誠実さ

を祝う時であることを忘れてはならない。これらの巨大な火の柱は、荒野の闇の中をイスラエルの民を導いた神の火の柱の恵みを記念するためのものであった。

g. 昼は雲の柱、夜は火の柱——これこそが、神がイスラエルの民を導き、指示するために用いたものだった。柱が動くたびに、彼らは幕屋を片付けてそれに従って移動し、柱が止まると、彼らもまた立ち止まって宿営を張った。それは、神が彼らと共にいて、彼らを導いておられることの象徴であった。

h. ミシュナーによれば、これらの巨大な火の柱は、イエスがこの大胆な宣言をしたまさにその場所、すなわち「女たちの庭」の中に立てられていたという。

4. さあ、私と一緒にその光景を想像してみよう。仮庵の祭りが終わった翌日だ。イエスは女性の庭にいて人々に教えを説いており、そのすぐ隣には、過去 7 日間、毎晩灯がともされていた燭台が頂上に載った巨大な柱が立っていた。

5. しかし今は暗闇だ。炎は消え、仮庵の祭りは終わった。人々が

34 祝賀と歓喜の場となっていたこれらの巨大な松明の光は、丸一年間、再び灯されることはないだろう。そして、これらの巨大な柱に囲まれた場所で、イエスは「わたしは世の光である」と宣言したのだ。

a. イエスはそう言ったとき、これらの大きな燭台の方を指さしたのであろうか。あるいは、その瞬間、燭台の一つを取り囲んでいたのかもしれない。これらの柱の前でなされたこの宣言の意義は、深く考えなければならない。

6. この人々は、荒野を旅する中で、これらの灯りを、自分たちと共にいる神の臨在、そして神による導きと導きの象徴として見ていた。それらの灯りは消え去り、イエスは人々に「わたしは世の光である」と宣言したのだ。

7. かつてあの灯りが神の臨在と見なされ、神の導きとして称えられていたのと同様に、イエスはご自身がそれと同じであることを証ししているのだ。すなわち、ご自身が神の臨在を体現して

g. 私たちはイエスにしがみついていなければならない。なぜなら、主なしには何もできないからだ。私たちは主を必要とし、主に近づき、主に導かれる必要があるのだ。おり、この人生を歩み抜くために彼らが必要とする導きの光であるということだ。

8. この言葉が語られた状況を考えれば、これは実に深遠な宣言である。

D. イエスはさらにこう述べている。「わたしに従う者は、決して暗闇の中を歩むことはなく、いのちの光を持つ。」

1. 動詞「従う」は現在能動分詞として書かれており、継続的かつ絶え間ない従順を表している。イエスに従うということは、まず第一に、信仰による信頼と従順をもってイエスに固く結びつくことを意味する。イエスに固く結びつく者は、また、イエスの導きに従い、イエスの模範に従って行動しなければならない。

a. イエスに従うということは、私たちがイエスのそばに寄り添い、イエスに固く結びつき、イエスがどこへ行かれるにも私たちもついていくこと、つまり私たちは切っても切れない関係にあるということだ。

b. つまり、もし私たちがイエスに従っているなら、どこへ行っても、イエスがまさにその場に私たちと一緒にいると想像できるはずだ。

c. 友人とコーヒーを飲みに行くとき、イエスはまさにその場に私たちと一緒に座っている。教会で奉仕しているとき、イエスは私たちと一緒にいる。オフィスで休憩しているときも、整備場で工具を扱っているときも、イエスは私たちと一緒にいる。もしあなたが家で小さな子供たちと過ごしているなら、その時もイエスはまさにあなたのそばにいます。

d. イエスに従うということは、イエスにすがりつき、どこへ行ってもイエスを共に連れていくことだ。

e. イエスに従うということは、イエスにすがりつき、イエスが動くときだけ動くということだ。イエスが「行け」と言われたら行く。主より先に行くこともなければ、主より遅れをとることもない。イエスに従うとは、イエスにとどまり、常にイエスとつながり、イエスと結びついていることだ。

f. イエスはこう言われた。「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝である。わたしにとどまり、わたしもその人にとどまる者は、多くの実を結ぶ。わたしなしには、あなたがたは何もできないからである。」（ヨハネ 15:5）

562. そしてイエスは、私たちが絶えず主に従うなら、暗闇の中を歩むことはない、と保証して下さる。

a. イエスは、暗闇の中を歩むことが不可能であることを、可能な限り強い表現で示している。ここでの「暗闇」の前に定冠詞「the」が使われていることから、単なる暗闇ではなく、「あの」暗闇、すなわちこの世の暗闇を指しているのだ。

b. イエスはここで、仮定法動詞を用いた二重否定を用いている。英語では二重否定が肯定に置き換わるのとは異なり、ギリシャ語では二重否定を組み合わせることで否定の意味がさらに強まるのだ。イエスが言っているのは、もしあなたが絶えずイエスに従うなら、闇の中を歩むことなどあり得ないということだ。それは、闇の中を歩む可能性や潜在的な可能性を完全に排除している。

c. もしあなたがイエスにすぎり、イエスにとどまっているなら、闇の中を歩むことはあり得ない。なぜなら、イエスはあなたと共にいて、その御臨在があなたを導き、導いてくれるからだ。イエスは世の光であるから、私たちは決して闇の中に置き去りにされることはない。

3. その代わりに、私たちはいのちの光を持つことになる。イエスはいのちの光である。

a. ヨハネによる福音書第1章にはこう記されている。「御方〔イエスを指す〕の中に命があり、その命は人の光であった。光は闇の中に輝いたが、闇はそれを理解しなかった。神から遣わされた人が一人いた。その名はヨハネである。この人は証しをするために来た。すなわち、光について証しをし、すべての人々が彼を通して信じるようになるためである。彼はその光ではなかったが、その光について証しをするために遣わされた。それが、この世にやって来るすべての人に光を与えるまことの光であった。」（ヨハネ 1:4-9）

b. イエスは、暗闇の中に輝くまことの光である。イエスはいのちの光であり、もし私たちがイエスに従うなら、暗闇の中を歩むことはなく、私たちの内にあるいのちの光が私たちを導き、導いてくれるだろう。

4. 今朝、イエスが私たちに与えてくださる約束はなんと栄光に満ちたものであろうか。イエスは、ご自身が世の光であることを証し、私たちが絶えずイエスに従い、イエスにすぎり、イエスにとどまるならば、暗闇の中を歩むことはなく、いのちの光を持つことになる、と語っている。イエスご自身が私たちの内に住み、この地をさまよう私たちの道のりの一步一步を導き、導いてくださるのだ。

E. 本文に戻り、13～16節の次の箇所を見てみよう。

IV. ヨハネによる福音書 8章 13～16節；

A. イエスは、ご自身が「世の光」とであると証しされた。すなわち、ご自身が神の御臨在そのものであり、女性たちの庭にあるあの大きな燭台に象徴される導きの光である、と。それに対し、パリサイ人たちは、イエスがご自身について証言したからといって、その証言は無効だと主張して反論した。

1. 律法では、事柄は二、三人の証人によって立証されなければならないと定められていた。申命記 19章には、「いかなる不義や罪についても、一人の証人だけでは人を告発してはならない。二、三人の証人の口によって、その事柄は立証されなければならない」とある。（申命記 19:15）

562. したがって、モーセの律法の観点からは、人が自分自身について証言することはできないという

彼らの主張には、事実、一理ある。

B. しかし、イエスは、たとえご自身がご自身について証言したとしても、その証言は真実であると証言している。他の誰かの裏付けがあったかどうかにかかわらず、イエスの言葉が真実であるという事実は変わらないのだ。

1. イエスは、自分がどこから来て、どこへ行くのかを知っていたからこそ、自分の裁きは真実であると証した。

2. イエスは天から来られ、天に帰られる方であった。イエスは神から来られたのであり、神はあらゆる点において真実な方である。

C. パリサイ人たちは、イエスがどこから来て、どこへ行くのかを知らなかった。それはイエスが彼らに告げなかったからではなく、彼らがイエスを信じようとしなかったからだ。

D. イエスは、パリサイ人たちが肉に基づいて裁いていると非難した。

1. 彼らは外見に基づいて裁く。自分の目で見て取れるものや、他人の行動に対する自分なりの解釈に基づいて裁くのだ。

2. 彼らは内面を見ることができない。裁く際、人の内側で何が起きているのか、全く見当もつかないのだ。彼らは外見、つまり肉に基づいてのみ裁く。

3. イエスはそのような方法で裁かない。「わたしはだれも裁かない」とイエスが言うとき、そこにはイエスがそのような方法で裁かないという意味が込められている。

4. 動詞は現在能動態の直説法で書かれており、継続的な行為を表している。パリサイ人たちは現在、肉に従って裁いているが、イエスはそのような方法、あるいはそのやり方で誰をも裁いてはいない。これが 15 節で言われている意味だ。

5. イエスは今、裁いていない。なぜなら、裁く時がまだ来ていなかったからだ。

a. ヨハネ 5 章 22 節によれば、すべての裁きはイエスに委ねられている。「父はだれをも裁かない。すべての裁きを御子に委ねておられる。」(ヨハネ 5:22)

b. しかし、その裁きの時はその時ではなかった。すなわち、イエスの初臨の時にはなかったのだ。それは後のこと、すなわち、イエスが「苦しむしもべ」としてではなく、「勝利の王」としてこの地上に再び来られる、再臨の時である。

c. イエスが今裁きを行わないのは、神が御子をこの世に遣わしたのは、この世を裁くためではなく、救うためだからである。(ヨハネ 3:17)

d. 後にイエスは、「わたしは世を裁くために来たのではなく、世を救うために来たのだ」と証しする。(ヨハネ 12:47b)

6. イエスは人々を救うための救出任務に就いており、彼らに裁きを下すためではなかった。その時はいずれ来るが、それは今ここでのことではなかった。だからこそ、イエスは今、誰をも裁いていないと証言できたのだ。

E. しかし、イエスが裁きを行う時、その裁きは真実なものとなる。なぜなら、イエスは肉に従って裁くのではないからだ。人が裁くような仕方で裁くのではない。イエスは、父なる神が裁くように裁くのだ。

1. 人は外見、つまり外側の姿を見るが、神は心を見る。サムエル記上 16 章にはこう記されている。「主

は人のように見ない。人は外見を見るが、主は心を見る。」（サムエル記上 **16:7b**）

2. あなたや私が裁くとき、せいぜい外見に基づいて裁くことしかできないが、心までは見通せない。人々の行動の背後にある動機を裁くことはできない。主が裁くように見たり裁いたりすることはできないのだ。

3. イエスは、父が見るように裁き、見る。イエスは内面、すなわち私たちの行動の背後にある動機や意図を見通している。イエスは私たちの心の中で何が起きているかを知っている。だから、イエスの裁きは常に真実であり、肉によるものではない。

F. 続けていこう。イエスが証しを続ける **17～20 節**を見てみよう。

V. ヨハネによる福音書 **8 章 17～20 節**；

A. まるでイエスが彼らの些細な異議に乗かって、「よし、二人の証人が欲しいというなら、どうぞ。私が一人、私を遣わした父がもう一人だ」と言っているかのようだ。

1. すると彼らは、やや嘲笑を込めて「お前の父はどこにいるのか」と問いかけた。宗教指導者たちは、イエスが誰であるかを知っているつもりだったことを思い出してほしい。彼らは、イエスが大工ヨセフの息子だと思っているのだ。

2. そしてこの時点で、ヨセフはもうこの世にはいない。この質問は、イエスを実の息子として育てたヨセフがもういないという事実や、イエスの誕生を取り巻く異例の事情を多くの人が知っていたという事実を、イエスに対して鋭く突いたものだったのかもしれない。

3. マリアは、ヨセフと法的に夫婦として結ばれる前に身ごもっていた。したがって、これはイエスに対する皮肉であり、イエスの誕生を取り巻く噂を揶揄するものだったのかもしれない。この章の後半では、彼らは「私たちは姦淫によって生まれたのではない」とさえ主張する。ここで「私たち」を強調するのは、イエスが姦淫によって生まれたこと、そしてイエスの父親について不確かな点があることをほのめかすためである。

（ヨハネ **8:41b**）

B. イエスは彼らのレベルに降りることはせず、ただこう答えた。「あなたがたは、わたしも、わたしの父も知らない。もしわたしを知っていたなら、わたしの父も知っていたはずだ。」

1. イエスは、御自身を知ることが父を知ることには他ならないと証ししている。御自身と父は一つであり、同一であるということだ。そして、彼らが御自身を知らないからこそ、父も知らないのである

2. これは、イエスが後にヨハネによる福音書第 **14 章**で弟子たちに説明することになる。イエスは、またしても大胆な「わたしは～である」という宣言を行い、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない。」そしてこう続けた。「もしあなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父も知っていたはずだ。今からは、あなたがたは父を知っており、父を見たのだ。」フィリポは[イエス]に言った。「主よ、父を見せてください。78 取った写本には含まれていなかったのだ。それだけで私たちには十分だ」と。イエスは彼に言われた。「フィリポよ、私はこれほど長い間、あなたがたと共にいたのに、あなたはまだ私を知らないのか。私を見た者は父を見たのだ。それなのに、どうして『父を見せてくだ

さい』などと言えるのか。私が父の中にあり、父が私の中にあることを信じないのか。」（ヨハネ **14:6-10a**）

3. イエスの証しは、イエスを知ることが父を知ることであるというものだった。イエスを見たなら、父を見たことになるのだ。

C. 21 節.....

VI. ヨハネ 21-24 ;

A. イエスは証しを続け、パリサイ人たちに、自分は去って行くこと、そして自分が行くところには、彼らには来られないと宣言する。

1. ファリサイ派の人々は再び、イエスが自殺しようとしているとほめかすことで、イエスに言葉の攻撃を仕掛けた。それは、自殺に対する彼らの信念に基づいた侮辱であった。

2. 一世紀当時、多くのユダヤ人は自殺をあらゆる罪の中で最悪のものだと信じており、自殺した者はハデスの最も深く暗い場所に追放されると考えられていた。

3. 彼らが「何だ、あいつは自殺するつもりなのか？」と言ったのは、イエスが冥界の最も深く暗い場所に落ちることになり、それゆえに自分たちは二度とイエスに会うことはないだろうと、傲慢かつ嘲笑を込めて示唆しているのだ。もちろん、自分たちはそこへイエスに従って行くつもりなどないというわけだ。

B. イエスは、「あなたがたは下から来た者だ。私は上から来た者だ。あなたがたはこの世に属している。私はこの世に属していない」と、極めて淡々と語っている。

1. さて、この箇所を読んで、イエスが侮辱に侮辱で応じていると解釈したくなるかもしれないが、ここではそのようなことは起きていない。

2. イエスが、彼らは下から来ており、自分は上から来ていると述べたとき、それは地上と天上の違いについて語っているのだ。イエスは次の文で、「あなたがたはこの世のものであるが、私はこの世のものではない」と述べることで、この点を明確にしている。

3. イエスは、彼らが物質的な地上の事柄に囚われているのに対し、ご自身は天の霊的な事柄に焦点を当てていることを語っているのだ。

C. ここでイエスは、ファリサイ派の人々がなぜ罪のうちに死ぬことになるのかについて、非常に示唆に富む説明をしている。

1. 24 節で、イエスはこう言っている。「それゆえ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬと、わたしが言ったのだ。もし、わたしが『その方』であることを信じないなら、あなたがたは自分の罪の中で死ぬからだ。」

a. さて、もしあなたが NKJV 版や KJV 版、あるいは NASB95 版の聖書を読んでいるなら、「彼」という言葉がイタリック体になっていることに気づくかもしれない。

b. そして、これらの特定の改訂版でこのように書かれた言葉に出くわすたびに、その言葉は英語の読みやすさを高めるために追加されたものであることが分かる。しかし、それは彼らが写し 9 10c. つまり、イエスが言っているのは、「もし『わたしこそがそれである』と信じなければ、あなたは罪のうちに死ぬことになる」ということだ。

d. 「わたしこそが」は、ギリシャ語で「エゴ・エイミ」だ。これは、モーセが神の名を尋ねた出エ

ジプト記の時代から、神がご自身を指して用いてきた名である。神は出エジプト記 3 章 14 節でモーセにこう告げた。「わたしは、あるがままの者である」……「イスラエルの民にはこう告げよ。『あるがままの者が、わたしをあなたがたのもとに遣わした』と。」（出エジプト記 3:14）

2. さて、イエスがここで何を証言しているか、わかるだろう？ イエスは、もしあなたが、イエスが「偉大なる『わたしはある』」であり、肉となった神であることを信じなければ、罪のうちに死ぬことになる、と証言しているのだ。

3. そして、あなたや私が罪のまま다가まま死ぬとき、私たちは自分の罪に応じて裁かれることになる。ローマ人への手紙 6 章 23 節によれば、罪の報いは死である。

a. イザヤ書 59 章 2 節によれば、私たちの罪は私たちを神から引き離す。（イザヤ 59:2）

b. 私たちは自分の罪に応じて裁かれ、主の御前で有罪と宣告され、主の御前から永久に追放され、永遠の残りの時間を地獄で過ごすことになる。そこは、泣き叫び、歯ざりし、消えることのない火と完全な暗闇のある場所だ。

c. これらのパリサイ人たちは、イエスが地獄の最も深く暗い底へと向かっていること、そして自分たちは二度とイエスに会うことはないだろうとほのめかそうとしたが、真実はまったく逆である。イエスは天国へ向かっている。そして彼らも、もしイエスを信じなければ、自分たちが決して行くことになるとは思ってもみなかった場所、つまりイエスが向かうと思っていたまさにその場所に、結局はたどり着くことになるのだ。

d. もし彼らがイエスを信じず、イエスが人となった神であると信じなかったなら、彼らは罪のまますべてを終わらせ、神から永遠に隔てられることになるだろう。

e. そして、それは今日でも変わらない。罪の報酬は死だが、神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちである。（ローマ 6:23）

f. イエスは、信仰によって御自身のもとに来るすべての者が、御恵みを受け、罪を赦されると約束している。「私たちは、恵みにより、信仰によって救われたのである。それは、私たち自身によるものではなく、神の賜物である」と、エペソ人への手紙 2 章 8 節にある。（エペソ 2:8）

D. さて、続けて 25 節でパリサイ人たちがどのように反応するか見てみよう。

VII. ヨハネによる福音書 8 章 25～28 節；

A. ファリサイ派の人々が投げかけた質問は、極めて重要なものだ。「あなたはどなたか」と彼らはイエスに尋ねた。確かに、その質問にどう答えるかによって、永遠の行方が決まるのだ。

1. イエスとは誰なのか。先週、エホバの証人の人々が私の家の玄関を訪ねてきたが、彼らはイエスが大天使ミカエル、つまり被造物であると信じ、教えている。

2. モルモン教徒は、イエスが墮天使ルシファーの霊の兄弟であると信じ、教えている。これもまた、被造物である。9 103. イエスが誰であるかについては、実に多くの異なる信仰があり、誰もがイエスの正体について独自の説を持っているようだ。

4. 「偉大なる『私はある』」、すなわち肉となった神であり、本質的に神聖で、永遠において神と等し存在である、という認識に及ばない限り、この問いに対する答えは間違っている。

5. イエスが預言者だった、あるいは優れた教師だった、あるいは単に道徳的な人物だったと言うのは不十分だ。それは、イエスが実際に誰であるかという現実から大きくかけ離れている。イエスは受肉した神であり、永遠に存在している。イエスは被造物ではない。イエスご自身が世界とそこにあるすべてのものを創造したのだ。
6. 「すべてのものは、彼によって、また彼のために造られた。天にあるもの、地にあるもの、目に見えるもの、目に見えないもの、すべての被造物は、コロサイ人への手紙 1 章 16 節によれば、イエスによって造られたのである。（コロサイ 1:16）
7. ヨハネの福音書は次のように始まる。「初めに、言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。この方は初めに神と共にいた。万物は彼によって造られた。彼なしには、造られたものの一つも造られなかった。」（ヨハネ 1:1-3）
8. 「そして、その言葉は肉となり、私たちの間に住んだ。私たちは、その栄光、すなわち、父の独り子としての栄光、恵みと真理に満ちた栄光を目にした。」（ヨハネ 1:14）
9. イエスが被造物であると言うこと、あるいはイエスが神ではないと主張しようとすることは、的を外し、イエスが誰であるかという問いに対して誤った答えを出すことになる。そして、イエスが「偉大なる『わたしはある』」、すなわち肉となった神であることを信じなかったために、私たちは罪のうちに死ぬことになるのだ。
- B. イエスはパリサイ人たちに答えてこう言った。「私は、初めから言ってきた通りの者だ。何度も何度も君たちに伝えてきたが、君たちは私を信じようとしない。」
1. ヨハネの福音書だけを見ても、イエスが当時の尊敬されていたパリサイ人ニコデモに、ご自身が救いへの道であると語ったことを思い起こせる。神がイエスを遣わされたのは、イエスを信じる者はだれでも滅びることなく、永遠の命を得るためである。[ヨハネ 3:16]
2. メシアが来ることを知っていると言った井戸端の女に対し、イエスは「あなたと話している私こそ、その人だ」と言われた（ヨハネ 4:26）。そして彼女は町中の人々にイエスのことを告げ知らせた。
3. ヨハネによる福音書第 5 章で、イエスは御父の業を行うことについて語り、ご自身を神と同等であると示した。[ヨハネ 5:17]
- a. イエスは、すべての裁きが御自身に委ねられていると言った。すなわち、御自身がこの世に対して神の裁きを行う者であるのだ。[ヨハネ 5:27]
- b. イエスは、御父から遣わされたことを何度も主張した。[ヨハネ 5:30b]
4. ヨハネによる福音書第 6 章で、イエスは「わたしは命のパンである」と宣言し、神が天から送ったマナがご自身の象徴であることを語った。（ヨハネ 6:35a）
5. 第 7 章では、仮庵の祭りの最中、注ぎの儀式の最中に、イエスはこう叫んだ。「だれでも渴いている者は、私のもとに来て、飲みなさい」と叫んだ。（ヨハネ 7:37）イエスは、要するに、荒野で水が湧き出た岩もまた、ご自身の予表であったと語っていたのだ。
6. 今日の聖句で、イエスは「わたしは世の光である」と語った。あなたがたが記念し、祝っているあの火の柱も、またわたしの象徴だったのだ。
7. イエスは、自分自身が誰であるかを、この人たちに何度も繰り返し伝えてきた。しかし彼らはそれを聞こうとせず、受け入れようとしなかった。彼らのメシアがまさに目の

前に立っているというのに、彼らは自らの罪と権力への欲望に目がくらんでしまい、イエスを見ることさえできず、イエスから何一つ受け取ることができないのだ。

C. イエスは、彼らに伝えたいことがたくさんあるが、父が語れと命じたことだけを語ると言われた。

1. イエスは、ファリサイ派の人々や世の人々に語る言葉が、父の言葉であることを証ししている。イエスの語るとはすべて父から来ており、真実であるのだ。

D. イエスは、彼らに「あなたがたが人の子を高揚させたとき、私がその方であることを知るだろう」と語った際にも、自らの来るべき十字架の死について公然と語っている。ここでも「その方」という言葉はイタリック体で表記されており、これは写本には見られないことを意味する。

1. イエスは、彼らがカルバリの十字架に御自身を掲げたとき、初めて、御自身がこれまで語ってきた通りの方であることを知るだろうと述べた。すなわち、御自身が「偉大なる『わたしはある』」であるということだ。

2. 彼らがイエスを十字架に掲げると、真昼にもかかわらず、三時間もの間、闇が地を覆う。大地は激しく揺れ、岩は裂け、神殿の幕は上から下まで真っ二つに裂ける。墓は開き、死者がよみがえる。イエスが誰であるか、もはや否定の余地はない。

3. 百人隊長と彼と共にいた者たちは、大いに恐れ、こう宣言するだろう。「まことに、この方は神の子であった！」（マタイ **27:54**）

E. イエスは、ご自身の語られることはすべて真実であることが示され、父によって裏付けられることを明らかにしている。

F. 最後の数節と、この箇所終わりにイエスが証ししている最後の事柄を見てみよう。29 節と 30 節を見てほしい。

VIII. ヨハネ 8:29-30 ;

A. イエスはパリサイ人たちに、御自身を遣わした方が御自身と共にいて、御自身がなすすべてのことは父を喜ばせるためであると告げている。

1. イエスは、常に御父を喜ばせることを行っていると証ししている。イエスの行うすべてのことは、御父を喜ばせ、御父に誉れと栄光をもたらすことと直接結びついている。

2. これは、完全さと罪のなさを主張するものである。イエスが常に父を喜ばせることを行うということは、イエスに罪がないことを意味する。11 123. また、これは父の御心との完全な一致を主張するものでもある。イエスは常に父の御心を行う。決して自分の意志を求めたり、父の御心から逸れたりすることはない。

B. あなたや私は、そのような主張はできない。私たちは罪がなくなく、常に父の御心を行うわけでもない。私たちは罪を犯し、不十分であり、迷い、神から遠ざかってしまう。イエスのように常に父を喜ばせることはできないのだ。

1. しかし、だからといって私たちに希望がないわけではない。私たちの罪や欠点にもかかわらず、それでもなお、私たちは父を喜ばせ、父に誉れと栄光をもたらすことができるのだ。

2. ヘブライ人への手紙 11 章 6 節にはこう記されている。「信仰がなければ、神を喜ばせることはできな

い。神に近づく者は、神がおられ、神がご自身を熱心に求める者たちに報いてくださる方であると信じなければならない」(ヘブライ **11:6**)。

3. もし私たちが信仰によって神のもとへ行き、御子をご自身が語られたとおりの方であると信じて御子に信頼を置くなら、主を喜ばせることは可能だ。神が喜ばれるのは、私たちの完全さではなく、私たちの信仰によるのだ。

4. 信仰こそが、神が私たちから最も喜ばれる唯一のものです。なぜなら、信仰こそが、私たちが自分自身を救うことはできず、神とその御子に完全に依存していることを認めるものだからです。

5. 信仰によって私たちは神のもとへ行き、神を必要としていることを告げる。それこそが神に大きな喜びと楽しみをもたらすのだ。私たちが、完璧になろうとするのではなく、単に信仰によって父のもとへ行き、神を必要としていることを認め、御子への信仰を認める者となれるように。

6. 祈ろう。